

資料紹介「飯塚恵理人宛辻山幸一氏書簡 (2015年11月29日消印)」

The letter from Mr.Kouichi Tsujiyama who is a SP.LP-record collector to
Erito Iizuka

梶山女学園大学文化情報学部教授
飯塚 恵理人
Erito Iizuka

はじめに

辻山幸一氏は神戸在住の SP・LP レコードコレクターで、新内・清元・歌舞伎・能楽などの関西における放送と関連した出演者・演目の良質なコレクションを所蔵されている。「メディアと古典芸能研究会」では放送文化基金による助成金を得て、氏の膨大なコレクションの中から特に関西の放送と関連深い出演者・演目のレコードを選び、デジタル化を行っている。作成されたデジタルデータは、著作権の消滅した盤のものについては研究会の代表である筆者が所属する梶山女学園大学の飯塚研究室ホームページ「恵理人の小屋」(<http://zeami.ci.sugiyama-u.ac.jp/~izuka/erito1/>)内の「辻山幸一コレクション」のサイトで公開している。

辻山氏は平成 27 年秋に病を得られ入院された。その折にこれまで歩んでこられた人生を振り返られてということで飯塚宛に書簡を送ってこられた。太平洋戦争後から平成初期までの昭和のレコードコレクターの生活がコレクター歴 60 年を越える辻山氏の筆により生き生きと表され、芸能の一次資料としてのレコード収集に関する貴重な証言となっており価値あるものと考えたので、飯塚宛の私信ではあるがここに辻山氏の御了承を得てその

全文を掲載することにした。

以下は辻山氏の原文のままであるが、飯塚が句読点・カギカッコなどの記号を適宜補った。文中には一部、旧仮名遣い等や現代において不適切な表現が存在するが、辻山氏の原文を尊重して訂正・削除は行っていない。また本稿は辻山氏の記憶によっているため、年代や人名など記憶違いによる事実とは異なる部分がある可能性があるが、裏付けの調査は別稿を期したい。

(安原コレクション追記)

〔この一段は、拙稿「ラジオ放送と蓄音機レコードが変えた謡曲の質—囃子方にシテ方が合わせる時代へ—」(「梶山女学園大学文化情報学部紀要」平成 28 年 3 月発行予定)に載せてある文章に対する辻山幸一氏による追記である。〕

安原コレクションが世に知られることになったのは、BK (飯塚注: BK は NHK 大阪放送局) から午後 2 時? で 30 分の枠組で「名人のおもかげ」のタイトルで放送され、義太夫は安原氏本人・能楽は沼艸雨 (この解説は後に活字化されて…新書版) 古典芸能研究室にあります。歌舞伎の解説者は失念。放送開始は S25 ~ 26 頃、私が最初にセンコー堂を教

えてくれた古レコード屋氏・・・元タクラシックのレコード屋で、LP 盤に転向して三の宮で店を開いていました。大正2年の生まれだと聞いた記憶があります。この最期のことは「レコード芸術」に投稿がありました。この人に聞いた話では、安原さんがSPレコードを持って「自分の店に寄った時に放送局（BK）の帰ってくる途中やねん。放送局がこの原板を元に2枚コピーをこしらえて呉れるネン。一枚は天理の図書館に渡してる」とか聞いた記憶があります。多分芯がアルミの遠心式の録音盤のことだと思います。この方のご息にお目にかかったことが一度だけあります。今は確か神戸の住吉に移転してるとか聞いていますが、LPレコード屋（中古）でbeethovenのエロイカのウラニヤ盤を店頭でウン十万で出ていたのを買っていたのを見かけたのです。この人は岡山の方の倉の中でSP盤をLP盤の最後期（飯塚注：CDに変わる1980年頃か）にダビングして東京の会社から出していたといふ、ジャンルに違いはあっても親子二代のレコードマニアだったと思います。

（LPとSPの双方の盤が出ていたこと）

コレクション新派にあるコロムビア盤の「滝の白糸」「日本橋」、これはNHK原盤を元にしていますが、同じ音源のものを双方買い求めるほどマニアックでもなく当時は「キューキュー」言っていたのが本音ですが、…記憶するところではNHKが放送で1時間に編集したのがカセットのそれで、コロムビア盤では「風もないのにそうぞうしい」のセリフがあるといふ様な珍なる現象が生じています。「有名なベルリンの女子100m」のレコードのB面の「前畑勝った前畑勝った」で終るのが、

そのあとにもう「ひとくさり」録音が残されたものが存在するといふことがあるそうである意味で通じることでしょう。

（辻山氏の父親 辻山幸平氏について）

途中まで書いて検査入院やら何やら、途中思い出しては忘れして先生（飯塚注：飯塚）と同じ病気の脳手術の前日となってしまうて、病室でしまったあと忘れてたですが……どこまで書いたやら申しわけないです。

結局はどういう育ち方をしていてこんな中途半端な人間に育ったかをお話しておきますと、こういふ私が出来上つたかといふと人間生まれ落ちての土壌だと思ひます。私の親父というのがメチャクチャ人間、芸事に凝ることなどもってのほかの人だったのですが、「何の何の」……最晩年に近くなって解ったことは初代の鴈治郎の追っかけまでやった人だったこと。私の生まれた昭和10年以前東京まで行ったといふのだから相当な人だったということ。私が買ったブロマイドの女形が誰れだったかわからないことがあり、母が上手いこと御機嫌のよい時に聞くと「お慶ちゃん」（飯塚注：「慶ちゃん福助」という愛称で親しまれた五代目中村福助。現在の九代目中村福助の祖父）と答が帰ったので相当人の代物だったというわけでしてこれが父の方、母の方は御存知の通り（飯塚：本稿後半に述べられているが、母方の従兄弟に往年の大女優八千草薫と、もう一人東宝の社員で役者をしていた人がいること）ですから私を入れて三人が二人は本職、私だけが素人芸人、それでも舞台には上ってるのですから……でもそれが本業にならなかったのが救われます。

(丸井不二夫氏のこと)

例の丸井コレクションの丸井さん(飯塚注:「新派・遠きあし音」などの著述がある新派俳優で劇団の事務職員)、あの方などは立派なもので芝居が好きで好きで家出して役者になったと聞いてます。確かお父上がその当時学校の教頭だったとのこと、そして新派の藤村秀夫の門下となり、戦後は番頭さんに転向、それが新派というジャンルが無くなってもそれを追っかけるだけの資料を残して呉れた、かけがえのない仕事を残された由来だと思います。資料として音以外にも三冊の書籍が残っているのはさすがだと思います。ちなみに御子息は東大医学部の先生ですからそういふ家系なのでしょうか。さて私はそういった尻尾の一人として出来たことは飯塚先生と大山先生(飯塚注:神戸女子大学古典芸能センター勤務の大山範子先生)に出逢えたという幸運にめぐまれたことです。「ゴミやゴミや」と言われながら何とか集めたものをゴミにせずすんだ幸せを思わずにいられません。私の集めたビデオテープが神戸女子大の研究室に立派にリスト付きでおさまってるのも嬉しい限りです。明日には頭の中のバイパス手術が上手く行き、歌舞伎関係のVTRを整理して大山先生にメイワクでしょうがお渡ししてなど、ゴミをゴミでなくする作業が出来ることを願っております。

(神戸の芸能文化土壌と淡路島の素人浄瑠璃)

神戸といふところはおかしな土地でして、新しいのか古いのか明治まで逆のぼって考へてみても不思議なところがあります。神戸の市街も元々の中心はJRの神戸駅の西南のあたりから神戸市の中央市場の南側にあるわ

けですが、芦屋の方と須磨にと金持は移住してまして、戦災を受けたこともあり古きもの何もしお寺=それもお墓ばかりというわけでした、遊芸を伝える三業地花隈も一軒もなし(親父の古戦場)、能舞台も楠公さんの観世のそれと上田さんの舞台(ここからは大山先生のお仕事)といふことでして、あとは神戸女子大に期待するのみです。

もうすこし大きく見ても、京阪神ということになっても古典芸能については心細い限りです。文楽もついに太夫が一人になってしまいました。義太夫といふ語り物の芸でも元々は好きな人が名前だけをつぐと言うのが原則ですが、今の人は親子二代目で例外です。その昔私がおぼえているのは、神戸の中突堤の船つき場で仕事で淡路に行く時に、大きなオッチャンがいましたがジット見てると初老の女性同行です。二人の会話が聞くとはなしに聞えてくるのを聞くと、どうやら鳴門で素義の会に行くのだとわかりました。今からabout50年前のことです。当時神戸から洲本まで船で2.5h~3h、そして洲本から福良まで小一時間、それから鳴門まで船で30分ぐらいですからキチガイでないと、といふ時間ですから気の遠くなる今では考へられない時間。その昔淡路の市といふ近くで仕事場にといらなくなった小学校の講堂を移築した祝いにまねかれて、その時出逢ったのが浄瑠璃ヅクシみたいなことで……その昔「幕間」といふ雑誌に投稿した……そんな土壌が田舎も都会にもありません。

(辻山幸平氏と戦前神戸のクラシック愛好サロン文化)

私自身おぼえているのが、第二次大戦で料

理屋などの広い空間が焼けてなくなりましたので、二十畳近い広間があった我が家に目をつけた（付け足したら家の広さは二十畳を越えてました）親父の関係者が貸してくれといふことで月に二度くらいはエンカイをしました。それに芸者さんが来る（それも戦災で開店休業の）といふことで、芸者はんがメイキャップして着付してまでそして何やらおどるのやらキャーと……を小学校の子供が見るのですから、それがエエとも悪いとも孔子とも孟子とも、よりすり込みがはげしいのですから、日曜日にしか家にいなかった親父が何をしてたか頭の中ではすっかり判ってしまった子供には三味線の音は知らん間に二上りも三下りも子守り歌みたいなものだったと思います。その親父ですが第二次大戦と第一次の間のことでしょうか、神戸にはサロン文化みたいなものがあつたらしく文部大臣まで行って亡くなった砂田重民さんの親、これも政治家の家に出入りしてたとは聞いています。クラシック音楽も親父はそこで仕込まれて、後年親父の口からプロンプテュ（飯塚注：おそらくシューベルトのピアノ曲「プロンプテュ ハ短調 op.90-1」のこと）といふ言葉が出て来たのにおどろいたおぼえがあります。

（歌舞伎に触れ、国文好きになる）

そして母のことになりますが、親父が戦後、とにかく三木本に次ぐ真珠の取引量があったとかで戦後の神戸の一つしかない会社の社長とやらにまつり上げられ月に一度はGHQとの折衝に東京に行く間に、ナイショで歌舞伎を見に行っていました。それがお話した「中学二年生に歌舞伎に見参した」ことにつながります。そして後年、私のことをこんなことに

なるとはと嘆いていましたが、植えつけて肥料までやってそだたないはずはありません。猿之助（初代猿翁）の小鍛冶で「足を見ときなさい」とあどばいすするのですから。それによくないことに「甲南」という学校での10年に浜口博章先生と出逢ふという不幸が加わってしっかりと国文学漬けが出来上りました。もって生まれた道楽に、親父のように芸者さんとは近ずきになりませんでした……芸事はいたってすきになってしまいました。

（レコード収集と新内コレクション）

手元に資料のないまま書いていると思いついたままに書くことになりましたが、新内にしても一番に聞いたのが「新内流し」victor盤（富士松喜昇社中）でその内にあった「蘭蝶」の一曲さり……king 盤岡本文彌へと連がり、あとはあの通りになって新内コレクション（飯塚注：ホームページ「恵理人の小屋 辻山幸一コレクション新内」<http://zeami.ci.sugiyama-u.ac.jp/~izuka/eritol/tujishinnai1.html>）が出来上りました。その新内から三月書房の吉川志都子さんへと連がるわけですが、その吉川さんも絵書房にいてゴマの数を勘定するのがいやでいやでと聞かされてます。甲南という学校、16単位は他学部のを充当することが出来るという項目を見つけた時のうれしさ。経済学部を、親父にナイショで文学部が聞けるということでニコニコして荒木良雄先生の国文学概論（古典をいかに近代小説が取り込んだか）、国文学特講世阿弥四番目物……など。加えて上田能楽堂が出来た頃でして、神戸能楽鑑賞会があと最後の数回。香西精先生も聞かせて貰えて。あとは私のことです。歌舞伎も新劇もお能も皆一緒。自己流に

本も読み、見に行きで自己流に消化して現在に至る、ですか。古典についての消化は浜口先生に教室で教えて頂いてといふわけで、とにかくムチャクチャです。その間に私としては「お茶」にのめり込んで、つまりは「お茶」を中心に焼物から何やかや……しかしこれは奥が深すぎて…今年の光悦会が手術日とは……残念ですが生にかかわることではさぎよくあきらめます……クラシック音楽……とにかく八つ手のごとくあれにもこれにも手をひろげて、もうすこし生かしてもらわんと締めくくれないというのが私の道楽人生です。

もうすぐ消灯の時間。10代の頃から80歳を一気に書き飛ばしてきましたが、凡人の私、ねられるかどうか。何しろ頭の手術ですから。その時にショウもない事を思い出しました。地方の旧家の蔵の掃除・売りはらいに行く古道具屋に聞いた話ですが、ケースに入った古レコードを持って帰ってくれと頼まれてことわるといふ話。出たらもらって来てと頼んだけどそこまでの話。一流の方の道具屋で聞いた話。私自身高架下の古道具屋で洋楽の片面盤を生ブの袋入りで求めたこと。本当のロー管を見付けて価を聞いて、誰れも買わんだらうと多加をくくって次の日に行ったらなかった話。私自身大事に本と入れてある入口のプレハブの物入にあるはずの中村鴈次郎のSP盤がみつからないことなど、イライラしてる間に十年位すぐたってしまったこと。前進座の地方巡業の舞台でその他大勢に地元の劇団の下ウケで出て、トビの者に出たのはいいがハンテンの衿が抜けてて裏にいるおばあちゃんにドヤされたことなどチョロチョロ思い出しますが、ここいらで止めることにします。

(辻山氏が見てきた名人達)

うだうだとメモなしにここまで書いてきて思い出したのは私の見た名人たち。能楽はまだノータッチ。そりや歌舞伎に関しては暖習会的な切符が家に転がってることもないといふ堅くて軟かい家だったので入手の方法等は学習ずみのこともありましたのですが、お能の世界だけはもう一段も二段も高く、甲南と言ふ学校が狂言を秋の文化祭に一番は出していたので善竹彌五郎さんの最晩年の舞台を見る機会を得ました。新制になってからの高校で私は五回ですから、先輩の狂言をおどろきの目で見ました。清酒の忠勇の若林さん、私の一年下の武智鉄二の兄弟などなど。その頃の私はウィリアム・サローヤンの「My Hart is Highth Land」(飯塚注：原文ママ)。よくやったと思います。それまでは大学生の女性の助人にたのみ、モリエールのミザントロープなど学園祭でしたのですから、正に文化祭と言えるでしょう。そのあと補導課に終戦時陸軍少尉という先生が座ようになり、自由さはなくなり女の役は男がせよで女形といふことになりました。

しかしこりない男の辻山幸一さんは歌舞伎を見ることは止めず、母の腰ギンチャクでお茶にもせっせと精を出すといふ事になりました。ここで知った無茶苦茶に奥行の深い世界には驚きの他ありませんでした。入札目録の戦前出されたものに見開きページ「札元」と名を連ねている道具屋さんに戸田彌七商店があります。ここの番頭さんに青山栄太郎といふ方がいて、いろんな事を教えてもらいました。その内に道具に関係のないことがあります。それは船場言葉です。書いた言葉、つまり文字に残したのは牧村史陽(上方文化研究)

と山崎豊子です。山崎豊子の小説「のれん」「ぼんち」、使われている言葉・字面だけでは西洲さんのかごしまべんですが、何ともやわらかい「ごわす」です。それが10年たたない間、私がそれこそ船場で社員としてつとめた頃に完全に消滅していました。それでも大阪美術倶楽部になっていた鴻池の本家の主人の部屋や台所はそのまま使われていました。その鴻池家の横丁にあった鰻家に「半助有り ㊦ (=ます)」と書かれた木札が下っていたのを思い出します。半世紀たってそんなことを思い出すなんて我れながらあきれます。その戸田彌七商店ですが確か名古屋から入られた方があとをつがれています。

脱線してしまいました。その当時、関西歌舞伎が大騒動からまともに芝居が打てなくなって見るものは何ものなしという時になりました。元々はその当時、武智鉄二をはじめとする関西の批評家がボロンチョンに関西歌舞伎をやっつけたのと、時を同じくしてTVが普及して居ながら見れるといふ事ですが、確かに関西の評論家は基本としては旦那が基本ですから「好きな事を言って何が悪い」です。この生き残りが権藤芳一さんです。絶対にヨイショナシ。それと同時に扇雀ブームに取り残されたぬるま湯につかった面々、先年亡くなった富士郎さんが気の毒の限りです。その富士郎が最晩年にTVで見た「うかれ坊主」手の動きがふぐ三津さん（飯塚注 八代目坂東三津五郎ふぐ毒中毒のため1975年（昭和50年）1月16日に急逝した。）の前の名人三津五郎に手の動きがそっくりなのに見えておどろきました。この人もおどりでは天下をとったと思います。今の藤十郎は一人残りましたが、とにかくこの年まで華があると

はすごいことです。

（辻山氏と能楽・オペラとの出会い）

私も前述の如くあれやこれや万事（ヨロズゴト）に首を突っ込み、仕入が「能」という事になりました。そこで母の友人の、言ふなればお謡をしている方に「見るものがない言うて今度は能や」としゃべったのが、荒木先生の国文学特講が役に立ったといふか何か、上田照也さんの門人のお弟子さんと言ふことでこれとは言う能の会の切符が届くと言ふことになり、サラリーマン時代後期にはシッカリと勉強させてもらふこととなり、一週間のスケジュールが映画・劇場・古本屋（もちろんレコードさがしも込めます）巡と、よくあんな幸な時間はなかったなあと親の仕事の真珠屋を……淡路島へ島流……なるまで飲めないのが幸いしたということでしょうか……。何しろ酒食料品の問屋ですから強い人間は無茶苦茶に強くなりますが、下戸はどうして逃げようかそればかりでした。問屋ですからビールは積み上げてあり空瓶が一本転がってたら不可。一函だったら得意先からの引取（空瓶も商品です）でバレません。期末になって数が合わないのを仕入が四苦八苦していました。毎日120函がトラック一台で入ってくるのですから。ですから帰宅時間はもう無茶苦茶…その時間を道楽につかったと言ふわけです。

忘れた……それにオペラ。これにも多くの時間とお金をつぎ込みました。当時テープレコーダーのオープンリールの花やかなりし頃ですが、これを元にした海賊版がアメリカで出廻ってることを知った私は何とかしてあの手この手で入手してこれも面白かった。しかしこれで解ったことは海外のレコードコレク

ターの質の高さと奥の深さでした。その当時クラシックレコードの月刊カタログがあり、それで日本から発注すると(私の場合ヤマハ)三ヶ月先には届くといふ……正期盤……しかし高かった。ヘンデルのアルキーナ三枚組が、当時 2800 × 3 (飯塚注: 原文ママ) が一ヶ月の給料ほばパア、それを黙認してくれた親父もわかい時にいい方の道楽をしてたから、飲まない分……ということだったからでしょうか。

これは書いてるかもしれませんが、私の生まれた時…当時は家でサンバさんが来て、が常識の時代。まず家に父親がいなかったこと。それをしらせたのは先ずおばあちゃんだったと思います。電話を受けたところは待合か料理屋か、芸者をはべらしてスチャラカチャンの最中で、その先が時代を先き取りした投ヒヨウで決まったのが私の名前で、親父の名の幸平から一字をとつて幸一に決ったとか。いやはや芸事に対する私の宮仕はここに端を発してるのかもしれませんが。

話が脱線しました。実は私、家内の謠も立ったところも一度も見ていないのです。結婚が決まってチャンスはあったのですが……前述の母の友人が式の当日、私に「村雨留舞うなんて大したものよ」と言ってくれたので……この人が太鼓判を押してくれるならと思った時は「後のまつり」、おいしいことをしました。私の舞台も、スナッフ写真はあっても他はなににもなし。半世紀前はそんなものです。調子に乗って書き飛ばしましたが、目下頭の中は狂ってないでよしとしなければならないので、何を書いたか見返してないので……こんなええ加減な思い出話、自分でもええかげんなここまでの半生です。大山先生に出合って

飯塚先生といふ方にお目にかかれて幸せだったこと、丸井不二夫さんのテープコレクション(新派)も私蔵に終ることなく伝えられたことに感謝の他ありません。元気になりましたら何とかテープをデジタル化する仕事に手をつけたいと思っています。

(安原仙三氏とご子息)

病室でポータライナーを眺めている時に、あれ書いたかなと思ひます。安原仙三氏御自身の、レコードコレクターとして書かれたものは確か上方に「末尾に続く」といふ記述で尻切れの記事を見たのが最初です(第二次大戦前)。戦後は「文楽」といふ大阪出版の雑誌に……丁度「名人の面影」の放送の出た頃に大阪で見付けて、外とう…着てられたものでまいて電車のラッシュを外して須磨に持って帰った苦心を書かれているのを見た記憶があります。大隅太夫の鰻谷です。これも出張録音で抜けがあったはず。この出張録音の片面盤(コロムビア)は、厚くて一見丈夫に見えてポカッと割れるヤッカイな取扱注意の代物です。ついでに思い出したのは、この安原さんの御子息に 10 年もっとになるでしょうがお目にかかったことがあります。この話は重複になるかも知れませんが…親子 2 代…どこかで連がっていると思います。

(海外の海賊盤)

海外の海賊盤の話、パイレーシー行為でも海外のは徹底してます。LP 盤時代の後期、メトロポリタン歌劇場でローマ歌劇場の出張公演があり、日本と興行形態がちがうのでイタリアでプロデュースしたものを持って行ったわけで、コーラスオケがどうだったか。面白

いのはその海賊盤、公開された放送が一切ないのにです。どうも客席の右と左にマイクをもって入った海賊さんが、外に電波を飛ばして外で録音したとしか考えられない代物です。アメリカのコレクターの話のつづき。この海賊盤のレコードボックスの絵の筆者が日本人の女性。念のいったことにこの女性の旦那の日本人が、私の先輩の会社にいた老人。こんなこともありました。

捨てられる前をお願いしたくて、孫も卒業したアンパンマンとは分類したく思っています。半世紀近く前に子供達の、今の孫の年齢の頃の8mmを「ヘソクリがたまったら」…でDVD化していますが、していてわかったこと。娘のダンナの写したビデオの中には、どこかにあるはずの私の若い時代の「サッソーと動いている映像」は一切なしという事実。瞳ちゃんの旦那、谷口千吉先生の書いた資料、その他資料が意外にないということ。没後「黒澤明研究会」からフィルムグラフィー、それが編まれましたが東宝でも100%、映画すべては残っていないと思います。残せば量的にどうなるか。デジタル化という手段がかなりそれをゆるしてくれていると思いますが、残すということ、「スタートはオール」でかからなければ残らないと私の経験からは判るのです。唯々家族からはヒンシク（飯塚注：原文ママ）的になることは間違いありません。

（古い録音の価値）

高木浩志の「文楽の芸」。病室に持ち込んで読んでいましたら、S25年からこの本の出されたS59年まで義太夫を録音してた人の事がありましたけどどうなりましたやら。私でも朝の能の時間を何となく録音していて何時の間

にやら演者がいなくなっていたといふことに
出くわすことがあります。大したことのない人が何か名人あつかいで紹介されたり、世の中はわからないものです。この世に一日でも長生きして、残せるものをより分ける仕事をしたいと思います…今度の歌舞伎篇のトリに九代目・五代目の紅葉狩などどうかと思ふのですが。

善竹彌五郎さんが文化財保護委員会に残した録音が、何かで読んだ話に行方不明とか何とか。近年の文化財研究所の目録に、名前は失念したが演劇研究家の蔵だったとかでそれらしいものが見える。NHKですらケチって、そう言った録音分が何があるかを公開していない。ヨーロッパの歌手で最古の録音らしいものがあるとわかると、それを国家としてケンショウ付でさがしているという話が半世紀近く前にあったが、日本では戦前に大山巖のロー管に入れたものが残っていたのが再現出来なかったと「レコード文化発達史」（山口亀之助）かで見た。で、もう（飯塚注：蠟管録音は）無茶苦茶に高くても私も買うのをあきらめた。しかしあちらではエジソンにはじまる声が残っているし、手にも入る。いつぞや先生（飯塚注：飯塚恵理人）にも御迷惑をかけた丸井コレクションのレコードも、東芝レコードが同時に吹込んだと思われるものとその元々の一連のシリーズと、同じく「日本吹込事始め」といふタイトルでCD化されているのにと「何を思ってるのや」といふ気分。でも丸井さんが残して呉れたコレクションが、完全に死んでしまった新派の芸を何らかの形で後世に伝えることが出来たと思ふし、歌舞伎学会誌にのったディスコグラフィーといふ文字だけによる資料による研究に役立つこと

と思ふ。

近年の話になるが、イタリアでとった口パクものの蝶々夫人も数年前にCD化されて残ったが、時代劇（日本映画）の中に入った「能」のコマ切の映画シーンですら今おさえておかないといふ気持ちもある。「あの映画は面の下の演者のエラ」が見えるので××だと「演劇評論」だけで読んだ記おくがある。数巻の古い録音しかない、名人達の芸のかけらもない古文化財の不幸をなげきたくなる。私のとりためた能楽のVTRは大山先生に助けてもらって神戸女子大にある。残るは歌舞伎・文楽篇、と思いは飛びます。

さてここまで書き飛ばした自伝めいた人間形成史みたいなもの。読んでみて（目で拾ってみて）女篇の残いことに気がつきました。あれを書くにもこれを書くにも、女篇がすくないのは仕方ありません。同じ高校のクラスで結婚したのが最後だと思ってたらブービー賞といったことです。手ブラより増（まし）ですか。女房・子供・孫全部女。亡くなった義兄の家内の姉・・・（9 + 1 =）10人。手も足も出ません。幸わ（飯塚注：原文ママ）せと申す他あります。半世紀前サラリーマン時代からつき合って今に至る女性の一人いるだけ。素人絵描きですがしっかりした思想をもってテキパキした女性で旦那もしています。これが一度家へうかがい、旦那の本箱岩波の青帯が「全部あるのでは」の量、上には上がいるものです。今、私の枕元には「何でもそのあたりに積んであるのでいいよ」と言ったら、サガンの「サラ・ベルナール」、藤原新也「チベット放浪」、澤野久雄「言葉のない手紙」、津本陽「名臣伝」、郡司正勝「鶴屋南北」、高木浩志「文楽の芸」、河出ムック「マリアカラ

ス」、桂宮本叢書「私家集巻の一」。これが私の人生だと思います。

（辻山幸一氏の御両親）

それにしても私の親のルーツというか何かと言ふと、雲と霧とは言いませんが、私も見当はついていますが無茶苦茶な人だった。事実だと思います。戦前、印度人相手の布を輸出をしてたのも事実ですし、家の中にミズミみたいなインド文字の手紙があったのも覚えてますし。戦後その家族がひとかたまり日本に来て、1～4夫人プラス子供、その内3やったか4やったかの夫人が日本人。母も知ってしゃべってた記おくがあります。進駐軍相手に、子供心にあのあやし気な英語で通じること、英語でやり取りするのは見てました。そこまで止めとけばよかったのが晩年の真珠屋。巻き込まれた倅こそ災難です。それがなければ船場の酒食料品問屋の番頭さんの末席ぐらいで、安月給をばやきながらくらしていたことと思います。

又、母方もつまりは珍なる方に属すると思います。母に聞いた話では、長持から引っぱりだした刀でチャンバラしてたのが兄、つまり私から言ふオジサン達で、母の一番上の兄が八千草薫のお父さんというわけです。先年大山先生の発掘した大阪能楽殿。彼女としたら当時、つまり戦前あのあたりに住みプール女学校に行っていた彼女。毎日に、近く見ていた大阪能楽殿を見た生き証人と言へます。宝塚では新珠三千代の一年下だったと聞いています。もう一人の役者は母の妹の長男・・・何かの間違いみたいに役者になってました。東宝芸術座が菊田一夫で出来上がった時に井上孝雄なんかと同期のはずで、台詞もあって

プログラムにも A・B・C でなくそれなりの役名もついで東宝の社員のはずです。ですからあの当時の芸術座が、その時その主役の寄せ集めですから子ガいの役者を一人づつ主役につけてたので、およそいろんなものをしています。それに私・・・学生役者・・・大学の時に・・・「お茶と同情」、映画化された時の主役はデボラ・カー、という舞台の主役で・・・・一寸は有名になりました。あんな役をしたおかげで一寸は有名になりました。「イトコ」三人かくなる次第でして。

手の器用なのはこの母方の祖父が戦前、別府で松田式竹細工という竹の小物細工の先生をしていました。竹の産地で細い枝などロスになるものを素材にして、今でいふ民芸の先生です。これも何も残っていない。私の大事にしている雛人形が二点、これだけ。本が一冊書かれています。かく左様に残っているのは母方から数えてみてもそれプラス 2 人で、明治から私を入れて 5 人が残っていて、その内の 3 人が何らかで芸の世界に首を突込んでいます。エエのやら悪いのやら。

ここまでウダラウダラ書き飛ばして先生のこと。上は荒木良雄先生、前述の浜口先生、高校時代に講師でいらした吾郷寅之進先生。自分自身のしたことに先生の専門の教えを受けたかった方、本田義憲先生。今から思ふと岩波文庫のリルケの詩集をもって現われる・・・・大学が出来ると一転してあやし気な先生は数を増し、いい先生は大学と二分された感があります。我々生徒も、あだなはつけ

てもソンケイ（…）すべき先生と、受験屋とさげすんで見る先生とふるいにかけてしまいました。ここで手術の糸もとれて傷口もきれいとお墨付が出ましたので、「おわり」にします。

おわりに

以上が辻山幸一氏の書簡である。この原稿をまとめている平成 27 年 12 月 28 日現在で、辻山幸一コレクションのうち飯塚研究室に移送・整理・保管されている、放送と関連するレコードの約 75% がデジタル化を終えている。これらは後世に放送文化として遺すべき貴重な一次資料である。しかしながらまだ、落語を中心として 25% 程度のレコードが残っているし、辻山氏の御自宅の物置に未整理のまま保管されているレコードもあると伺っているので、全体を整理・デジタル化を済ませ長く保存できる形にするためにはなお数年を要する。貴重なコレクションなので「メディアと古典芸能研究会」の事業として継続的にデジタル化を進め、すべてを後世に遺したい。

補記 貴重な書簡の掲載を御許可下さった辻山幸一先生、「メディアと古典芸能研究会」の皆様、大山範子先生並びに神戸女子大学古典芸能センターの皆様にご感謝致します。本稿は平成 26 年度放送文化基金助成及び平成 27 年度嵯峨山女学園人間学研究センタープロジェクト「日本・アジア文化と人間」の飯塚担当分成果の一部となります。記して感謝申し上げます。